

● 優秀賞

五七五のリズムを国語の授業に生かす

鳥取県岩美郡岩美町立岩美北小学校 みたにゆうじ 三谷祐児

1 願い

教師となって以来、子どもたちに、

A：「感性あふれる俳句や短歌を作らせたい」

B：「書くことを通して美意識を育てたい」

この願いを強く抱きながら授業実践を重ねてきた。しかし、いくら創意工夫をこらして授業に臨んでも満足いく結果は得られなかった。

けれども、5年前、俳句の「取り合わせ」の技法と「句会」に出会い、この方法を国語の授業で活用すると、五七五（以下俳句・短歌・川柳等の総称として使用する）に関する授業はもとより、作文教育の分野においても大きな成果が見られるようになった。

つまり、「取り合わせ」の技法との出会いは、子どもたちの五七五に対する興味関心を喚起するとともに、瑞々しく感性にあふれた作品を生み出していった。そして、「句会」との出会いは、子どもたちの言語に関する感覚を鍛えるとともに、自己表現力を鍛える上で大変有効であった。また、作文力の向上と五七五のリズムに慣れ親しむことをねらいとした「100ます作文」の積み上げは大きな効果があった。

AやBの願いを達成するための実践の中から、本論考では、俳句や短歌の専門家でなくても（国語を専門にしていない教師であっても）、国語の授業を通してだれでもできる五七五の指導並びに「100ます作文」の取り組みを紹介したいと考える。

2 具体的な実践内容

(1) 国語の授業における五七五の生かし方

ア 学習後の感想を五七五でまとめる

五七五のリズムに慣れることをねらいとしながらも、「小学校3年生の子どもたちに俳句を作らせたい」という願いを実現するために、学習後の感想を五七五や五七五七七のリズムでまとめる学習を重ねた。これはリズムだけを指導し創作させたものである。

子どもたちは教科書の本文の中から自分の印象に強く残った場面と言葉を選び、作品に仕上げていった。

- 「森に生きる」（3年光村図書）の感想を五七五でまとめる。（2000年5月実践）
 - ・フクロウの 聞き耳立てる 春になる（Y）
 - ・ひなは木の あなから父さん 鳥のえさ（T）
 - ・そとをみて とびたいところ かもしらん（O）
- 「やどかりのすみかえ」（3年光村図書）の感想を五七五七七でまとめる。（2000年6月実践）
 - ・やどかりは すみかえのとき 貝がらにくるりとはいる クルリンチョ（A）
 - ・やどかりは すみかえすると 体がかわるすがたがかわる 心もかわる（M）
 - ・気に入った 貝をさがして すみかえる ひっこしずきの やどかりさんね（Y）
- 「ありの行列」（3年光村図書）の感想を五七五七七でまとめる（2000年6月実践）
 - ・道すじを 外れず歩く 行き帰り
においにそって 歩き出すあり（H）
 - ・庭のすみ はたらきありは いそがしい
えさまでつづく ありの行列（Y）
 - ・ウイルソンは 研究したよ こまかにね
はたらきありの 体のしくみ（T）

この学習を通じて感じたことは、日本の子どもたちは、幼児期の言語生活の中で、教えられなくても、ごく自然な形で五七五のリズムを体得しているのではないかということである。そう考えられるほどスムーズに子どもたちは五七五のリズムを受け入れていった。その後、この学習は物語文等でも同様に行い、でき上がった作品で句会を実施したり、その結果を一枚文集にして学級通信に載せたりして保護者へも発信していった。

イ 形式段落の要旨を五七五でまとめる

アの次に実践を試みたのは、説明的文章の形式段落ごとの要旨を五七五でまとめることである。内容の読みとりのために各段落に小見出しを付けたりする学習活動があるが、そういう場合「重要語句やキーワードをさがして」とか「作者の言いたいことは何?」とかという問いかけをして、クラス全体で要旨をまとめていくのが定番である。しかし、これは児童にとってはとても高度な問いかけと考える。なぜなら、算数などとは違い絶対的な正解というものがなければ、苦心して作っても教師が用意している答えと違えば却下される場合もある。小見出しだから短くと言っても、重要語句を落としてはならないために次第に答えは長いものになっていく。したがって、児童にとっては文章の要約は難しいものになっていく。

しかし、最初から五七五の17文字でまとめると分かっていたらどうだろう。児童にすれば17文字という学習の目安となる具体的な数値（負荷）が提示されることにより、学習に対する意欲が増すものと思われる。実際、五七五で取り組ませると、そうでないときと比べ格段に集中して取り組む姿が見られるのである。

これは五七五という負荷が学習に対して有効に働くという点と、重要語句を「五」と「七」と「五」に分けて考えやすい点にあると考えられる。「五」と「七」と「五」に分

けて考える場合、子どもたちはその形式段落で最も重要な内容と考えられるところを、主語と述語と目的語に分けて捉えたり、重要語句を3つさがして並べ替えをしたりして要旨をまとめてくる。この学習の集中力は素晴らしく、子どもたちが五七五に慣れてくれば、以前3～4時間かけて四苦八苦しながら要旨をまとめさせていた学習を1時間で終えることもできる。しかも質の高い要旨のまとめが生まれてくる。

●「インスタント食品とわたしたちの生活」

（5年東京書籍）の要旨をまとめる。（2003年実践）
（H子の国語ノートより引用。1時間で次のように要旨をまとめた。）

- ①ラーメンはお湯かけ3分でできあがり
- ②続々とインスタントが生まれてる
- ③インスタントなぜ生まれなぜかんげいされたのか
- ④生活は今と昔じゃ大ちがい
- ⑤インスタントは時間が短く便利だな
- ⑥昔にはかん単便利くず湯あり
- ⑦インスタントは何より便利味うまい
- ⑧現在は味と香りが変わらない
- ⑨非常時にインスタントは役に立つ
- ⑩必要な量がそろって安くすむ
- ⑪インスタントにたよっていたら問題あり
- ⑫一つ目は家庭の個性がうばわれる
- ⑬二つめは料理が下手になることが
- ⑭三つ目はたよってしまう栄養だ
- ⑮便利さを上手に生かし豊かな食生活

上記のアイの2つの実践は、五七五を用いて書くという手法を国語の授業に生かす方法である。五七五や五七五七七で書くという活動は国語の授業のみならず、他の教科や領域へ発展していく大きな可能性を持っていると考える。

(2)「取り合わせ」で五七五への抵抗感をなくす

俳句の指導に悩んでいたときは季語にこだわり、あたかも季語の呪縛に縛られているか

のようだった。しかし、五七五の実践を積み上げて行くうちに俳句には次の二つの作り方があることを知った。一つは「一物仕立て(いちぶつじたて)」, もう一つは「取り合わせ」である。ここではっきりしたことは、指導に困難性を感じていたのは「一物仕立て」で指導していたからだということであった。そこで、俳句の導入や入門期である小学校段階での指導では、とにかく「取り合わせ」から入ることにした。

「一物仕立て」とは、季語の内容を17音に引き延ばす方法で、句全体が直接的に結び合っている俳句をいう。これに対して「取り合わせ」とは、12音と5音は必然性はなく直接的でなくてもよい俳句のことをいう。

実際、「取り合わせ」で俳句を指導していると、全く季語を気にせず楽しく指導している自分自身に気づくことがある。子どもたちも楽しんで俳句を作っている。そこには俳句を作るという抵抗感はない。

1 「取り合わせ」について説明する。

①○○○○○○○ ②○○○○○○○○○ ③○○○○○○○
 ①○○○○○○○ ②○○○○○○○○○ ③○○○○○○○

□の部分の12文字(5+7, 7+5)を先に作ることを指導する。次に残りの5文字の部分に季節を表す言葉を入れることを指導する。

2 五のリズムの季節を表す言葉を見つけ発表する。

あかとんぼ ひがんばな くりごはん さつまいも
 あきの○○(海・雲・空・風・夜) たいふう○等

ブレインストーミングで発表させる。クラスの人数の倍ぐらいの言葉は出てくる。

3 俳句を作る。

12文字を考えさせ、あとで2で出てきた言葉を上5か下5に入れ込むことを指導する。もちろん、2で出てきた言葉以外の言葉を入れてもいいし、「取り合わせ」にこだわらなくてもいいことを指導する。

4 ペンネームを考えさせ、俳句大会をすることを予告する。

左段の囲みにあげたのは、小学校2年生に「取り合わせ」について説明し、俳句を作る授業実践例(2004年9月実施)である。

(3)句会で五七五の表現意識を育てる

子どもたちの作品をどのように認めて返してやるか。実はこれは作文教育にとってとても大切な視点である。子どもの作品をすぐに評価して返してやるのが次の作品への意欲につながっていくからである。しかし、なかなかすぐには返せないのが実状ではなかろうか。そういう中で、子どもたちの作品を一枚文集にし、句会を開き、その結果を学級通信に載せて保護者に知らせる方法は、教育上子どもたちにとっても保護者にとってもとても効果的な方法であると考えられる。

さて、句会との出会いはある意味で私の教育観に大きな影響を与えた。一般的に日本人は欧米人と比較すると、日本人はコミュニケーション能力に劣る面があると言われている。しかし、それは本当だろうか?と以前から疑問を持ち続けてきた。過去の歴史の中を探ると、日本にもすぐれたコミュニケーション能力を発揮できる場があるのではないかと考えていたのである。そして、句会と出会ったとき、まさしく句会のあり方が日本の精神文化を形づくってきたものの一つではないかという思いと、コミュニケーション能力を鍛える場として句会ほど適切な場はないという思いが生まれてきたのである。

前者の思いについて言えば、句会には「自分の作品は選ばないしコメントしない」という大原則がある。自己主張をしないのである。欧米人からすれば日本人は自己PRが下手であると指摘されそうであるが、その精神は句会からきたものではないだろうか。

後者の思いについては、アサーション(非攻撃的的自己主張)的なコミュニケーション能力を鍛える上でも、また投句した人相互のよりよきコミュニケーションを保つ上でも有効

な方法であると考えるのである。なぜならば、自分の作品だけは分かっているがあの作品はだれの作品かも分からないからである。ある作品に対しどんなに厳しいことを言っても、言う方はある特定の人物に対して言っているわけではないので、言われた方は全く傷つかないのである。傷つかないどころか厳しい意見に対しても肯定的なアドバイスとして受け入れられるからである。だから、コミュニケーション能力を育て仲間づくりを推進する上からも句会は有益であると断言してよい。

本来の句会は、一般的に右段の囲みのように行われる。

●一般的な句会の流れ

- ①句を投ずる（投句）。
- ②作品をかき混ぜて出席者に配布する（配布）。
- ③配られた句を清記する（清記）。
- ④回覧しながら句を選ぶ（選句）。
- ⑤発表する（披講）。

次に、私が考えた句会の流れとその指導の留意点を示す。（資料1）

授業では2時間扱い、1時間目は投句まで。2時間目までに指導者は作品を清記する。2時間目だけを句会ととらえても可。

句会の流れ		指導の留意点
1 時間 授 業 外 で	① 作品づくりをする（投句）。 【1時間】	<input type="checkbox"/> 自分の作品を人に見せないこと言わないこと。 <input type="checkbox"/> 友だちの作品を見ないこと言わないこと。 <input type="checkbox"/> 俳号（ペンネーム）も教えないこと聞かないこと。
	② 一枚文集を作る（清記）。 ※授業以外に指導者が作成	<input type="checkbox"/> 次の時間までに一枚文集を作成しておく。 <input type="checkbox"/> 作者の名前は伏せる。ペンネームはあっても可。 <input type="checkbox"/> 作品には番号を必ず付ける。 <input type="checkbox"/> 別に投票用紙も作っておく。
2 時 間	【2時間目：ここからが本番】 ③一枚文集を配布し、各作品を 2回ずつ読み上げる。（選句）	<input type="checkbox"/> だれの作品か分かるような発言はさせない。 <input type="checkbox"/> 作品数分の番号を黒板に書く。 <input type="checkbox"/> 読み上げを聞きながら、気に入った作品を3つ選ぶように指示する。
	④ーア 開票する（披講）。 ※開票が進むにつれ、子ども たちは本当にハラハラドキド キしてくるらしい。 ◆半分程終了した時点で◆	<input type="checkbox"/> 投票用紙（選んだ3つの作品）を回収する。 <input type="checkbox"/> 指導者は、例えば次のように言いながら開票を行っていく。「○番の人、○○さんが選んでくれたよ。感謝してね。」「○○さんが選びました。○番、○番、○番。」 <input type="checkbox"/> 開票の全体の傾向を講評する。
	④ーイ 感想発表。 ④ーウ 開票を続ける。	<input type="checkbox"/> 気に入った作品について感想を発表する。 <input type="checkbox"/> 座を盛り上げる工夫をする。
	④ーエ 意見発表。 ④ーオ 投票する。	<input type="checkbox"/> グランプリ候補を6～7句に絞り込みどの句がよいか意見を言い合う。 <input type="checkbox"/> 絞った句で再度決選投票を行いグランプリを決定する。ここで逆転優
		時間の都合で、 ④ーウまででグランプリを決定してもよい。

	勝もありうる。
⑤ 受賞者感想発表。	<input type="checkbox"/> 温かい拍手を忘れない。
⑥ 指導者による講評。	<input type="checkbox"/> 選ばれなかった句などを救ってやる。
⑦ 句会の感想を書く。	<input type="checkbox"/> 時間があれば句会の感想を書かせ次回に役立てる。 <input type="checkbox"/> 結果を学級通信にして保護者に配布する。

●資料1/私の考えた句会の流れ

以上が私が考えた句会のやり方である。

作文などを評価するには時間がかかるが、俳句や短歌だとすぐに評価ができ、短時間で一枚文集に仕上げることができる。子ども作文力を伸ばすには、タイムリーな評価が必要なのである。

以下に載せるのは句会後の5年生の感想である。(2001年6月短歌大会実施)

- 意見を言い合うときがすごかった。それからHさんが入れてくれてすごうれしかった。わたしは17番と20番を選びました。そうしたら、17番のYさんが準グランプリになりました。うれしかったしすごいなあと思いました。
- 意見を言い合うときに、みんながすごい意見を言っていて感心しました。グランプリになった人はすごいなあと思いました。今度はグランプリをめざしてがんばりたいです。
- 17番と言われると「ドキ」としました。「グランプリになりたくない」と言っておきながら、内心17番と言われると、「ヤッター！グランプリになれるかも」と思っていました。「どうせだめだ」と思っていたけど準グランプリになりました。とてもうれしかったけど、みんなの前に出たとき上がってしまいました。次もがんばります。
PS：先生、次は俳句大会やりましょう。



●写真1/「句会の流れ」③の場面

写真1は、読み上げをした後、気に入った作品を選ぶ前に感想を発表している様子。友だちの感想を真剣に聞いている様子を感じられる。



●写真2/「句会の流れ」④ア～ウの場面

票が入った作品に正の字を入れていく。だれが何番(自分)の作品を選んでくれたかをはっきりさせる。子どもたちは自分の作品が選ばれるかドキドキするとともに、作品を選んでくれた友だちに本当に感謝するという。



●写真3/「句会の流れ」⑥の場面

グランプリの作品や準グランプリの作品が決まった後、一つ一つの作品についてコメントを入れてやる。だれの作品であったかも公表する。1票も入らなかった児童への配慮も忘れないようにする。

資料2は、2年1組で行った俳句大会の様子を伝える学級通信、左の番号がある部分が俳句大会用の一枚文集である。



岩美北小学校 2年1組
 学級通信 No.19
 10月8日(金)

2年1組 アナーシヨナル 俳句大会

7日の国語は、三谷先生と一緒に俳句大会をしました。俳句大会は、俳句をペンネームにて紹介し、お互いの詠んだ俳句に感想を言い合い、自分の俳句以外のすばらしいと思う俳句を選びます。
俳句を学び始めて日が浅い子どもたちですが、とても楽しい句会となりました。



どの子どもも、なかなかセンスがいいと思いませんか。子どもの時、こんな感覚を味わったなあと思います。後半の展開がこうきたかと意外性を感じたりと、俳句のおもしろさを感じる作品ばかりです。
結果、今回の優勝は9番「すずしさと すすきで かんじる 秋の夜」の中村みつさん、準優勝は14番「秋の夜 虫のがっしょう おもしろい」の横山あすかさんでした。選ぶ子どもたちのセンスもすばらしいと思います。3位は5番「秋の夜 もみじが赤い やけどしろう」のおくたに海さん、18番「秋の夜 夕日とくす 月と出す」の中村じゆらんさんでした。3位といえども、大人には奮けない感性のある作品です。
秋の夜
子どもと共に
一句詠む
(ヨソバ LOVE)

この連休に 親子で俳句など詠んでみませんか。

☆ 最近、子どもの命をおびやかす事件が立て続き起っています。秋の夜は特にはやく日が沈みます。5時半には帰宅すること、遊びに行くときは「どここの家に行くか」「何時に帰るかなど」大人に言ってから出かけることなど、もう一度確認したい物です。☆ クレパス、マスクなどの忘れ物があります。例えばマスクを忘れても、平気ではなく持ってこようとする子どもに育てたいです。担任もがんばりますので、声かけをお願いできればと思います。

21	あおいそら夕方までは光ってる	(中田)
20	あきのきせつつくもふわあわあきのくも	(かずか)
19	秋の響そらにいつぱいそらみえん	(くりはらめぐみ)
18	秋の海夕日をかきす月を出す	(子次)
17	さつまいもたべておならぶよう	(ようかん)
16	ひがんななどるとあぶないあきのそら	(ローズくん)
15	あきのそらゆゆやけでてるあかとおしほ	(さくらんぼ)
14	あきのよるむしががっしょうおもしろい	(みにい)
13	秋の風たいふう充ちとよかよした	(シヨコ)
12	はじめてのあきのいねかりたのしいな	(くるくるちゃん)
11	いるかさんごみをとるよたのしいな	(ハム太郎)
10	ゆうやけでよく見えないよあかとおしほ	(あんこてん)
9	すずしさをすすきでかんじる秋の夜	(アンパンマンさん)
8	秋の聖まつかのそらはきれいだな	(ひめたろう)
7	赤とんぼきもちよさそういきもち	(ミツキ)
6	さつまいもあきのやさいはおいしいよ	(こげぼん)
5	秋の日もみじがあかいやけどしろう	(バカぼん)
4	くりごはん秋のおはふかくて	(ワルトマン)
3	たいふうでかさもこわれるたいへんだ	(ねこ)
2	まつかの秋の空にあかとおしほ	(スヌーピー)
1	やまのなかくわがたむしがとんでいる	(かぶと)

●資料2/学級通信「いきいき」

(4)「100ます作文」と五七五

作文力の向上をめざして、「100ます作文」という短作文の指導を積み上げてきた。

「100ます作文」の方法とねらいは次ページの表1に示すとおりである。

	「100ます作文」の方法	ねらい (□) と留意点 (・)
①	3分間で100字前後 (低学年80字・中学年90字・高学年100字) の作文を書く。	<input type="checkbox"/> 題材選択能力の育成。 <input type="checkbox"/> 文章構成能力の育成。 ・ 100字以上書いてももちろん可。 ・ 3分経ったら途中で書くことを中止する。 ・ 書き出しと終わりを考える力の育成。
②	自分の書いた作文の内容を1分間で五七五にまとめる。	<input type="checkbox"/> 文章を要約する力の育成。 <input type="checkbox"/> 五七五のリズムに慣れさせる。
③	作文のできばえや取り組みを自己評価して提出する。(5段階)	<input type="checkbox"/> 自己評価能力の育成。

●表1 / 「100ます作文」の方法とねらい

この「100ます作文」では、文章を書くことへの抵抗感をなくすことも大きな目標としている。そのために、次のような「題は書かないこと」「字が乱れてもいいこと」「漢字をむりに使わなくてもいいこと」「ひらがなでもいいこと」「語句語法が間違っても気にしないこと」「書けなくても気にしないこと」等もあわせて児童に指示している。

始めの頃こそ、時間をかけて指導したが、4～5回もすると、5分～10分ぐらいで「100ます作文」が実施できるようになってくる。この取り組みを、平成15年度から2年生以上のクラスで週1回以上実施し作文力を鍛えてきた。そして、日頃はこの「100ます作文」に取り組みせ、各学期の最後に原稿用紙2～3枚のひとまとまりの作文を書くように計画した。この取り組みを始めた平成15年の1学期の最後に、ひとまとまりの作文に挑戦させたところ、2年生以上のほぼ全クラスで、30分以上も静かに鉛筆の音だけが流れる集中して作文に取り組む子どもたちの姿が見られたのである。まさしく「100ます作文」の効果を確信した瞬間であった。

五七五で要旨をまとめさせるのも効果がある。文章を要約する力をつけるとともに、俳句や川柳の創作の練習を行っているのである。

●資料3 / 100ます作文高学年用原稿用紙

子どもたちの作品の中でよいと思われる作品には「俳句へ」「川柳へ」といった付箋を付けて返すことにしているが、実際「100ます作文」で作られた俳句や川柳をコンクールに応募し、たくさんの作品が入賞している。

3 成果と今後の課題

五七五を生かした国語の授業実践での一番の成果は、子どもたちに表現する楽しさを体得させたことではないかと考えている。つまり「書くこと」は楽しいこと、自分の書いたものを友だちが認めてくれるのは喜びであること、また認めることも大切なことであること、これらのことを学んだことが一番の成果であると考えている。この取り組みは児童詩や作文にも発展していった。平成15年度のコンクールの入賞や報道機関で紹介された作品は延べ120作品近くにもものぼった。さらに、この取り組みは保護者・地域にも支持され、五七五の取り組みは本校の特色ある教育活動の一つとなっていった。

昨今、国語を中心にした学校づくりが叫ばれる中、これらの実践を深めるとともに、五七五のみならず、日本の過去の実践に学びながら国語の可能性をさらに探っていきたいと考える。